平成 20 年度　環境省エコインターンシップ　シンポジウム

パネルディスカッション議事録

開催日：平成２０年１２月２１日（日）
会　場：東京国際フォーラム
テーマ：「環境に配慮した社会に向けた『仕事』のあり方」
参加者：**＜コーディネーター＞**
草野　満代氏（キャスター）
＜パネリスト（五十音順）＞
桶谷　省氏（積水化学工業（株）住宅カンパニー住環境事業部 企画部担当部長）
末吉　竹二郎氏（国連環境計画 金融イニシアチブ特別顧問）
安井　至氏（(独)科学技術振興機構 研究開発戦略センター 上席フェロー）

【草野氏】

皆さま、こんにちは。コーディネーターの草野と申します。今日はどうぞよろしくお願いいたします。

インターンシップに参加された学生さんたち、本当にご報告も含めてありがとうございました。お疲れさまでした。漠然と抱いていたイメージから、短期間ですが実際に企業に行って、見てきて感じたこと、例えばエコロジーとエコノミーの両立はやはり難しいなと、さまざまな報告がありました。これから仕事をしていく上で非常に貴重な体験になったのではないかと思います。

さて、このパネルディスカッションですが、時間も非常に限られています。どのようにこの先、環境問題とかかわり、また企業活動の中で環境を考えて働くとはいったいどうなっていくのかということを中心に、こちらにいらっしゃる皆さんにお話を伺っていきたいと思っています。

まず出席者のお三方にそれぞれ自己紹介をいただきたいのですが、現在のお仕事、それから環境問題とのかかわり、そんなことも含めてお話しいただけたらと思います。では、末吉さんからお願いします。

【末吉氏】

皆さま、こんにちは。今日は皆さまの前でお話しできる機会をいただきまして、

ありがとうございます。私はいま金融機関がもっと社会のために頑張れないかという視点を強く持っています。どういう意味で頑張るのかというと、貸しはがしをやめろということではありません。もっと長期的な視点から社会を変えていく、あるいは経済のあり方を変えていく、国のあり方そのものを変えていく。そのために社会のお金の流れを変えようじゃないかということです。

これから学生の皆さんも社会人になると、自分のお給料が入る口座をお持ちになると思います。銀行にお金を預けることになります。自分が銀行に預けたお金がいったい、銀行を通じてどこに流れているのだろうか。こんなことをもっともっと社会全体が真剣に考えて、社会のために金融機関を通じてお金が流れていく。そのことが、いま地球社会が抱えているさまざまな問題、地球温暖化もその最たるものです。あるいは貧困問題といったことも含めて、地球社会が抱える、あるいは日本が直面する問題の解決に、社会のお金の流れを変えて問題解決を図ろうということを、いま一生懸命考えています。

【草野氏】

それでは続いて安井さん、お願いします。

【安井氏】

安井でございます。最近やっている仕事は、皆さん、ひょっとするとあまり知らないかもしれません。今やっている仕事は、実を言うとお金に絡むことです。といっても国のお金なのですが。要するに、どういう科学技術に投資をするといちばん日本という国がもうかり、しかも地球もよくなり、しかも皆さんの生活の程度がよくなるか。この難しいことが最近の私の商売になっています。どういう科学技術をつくればいいか、そういうことを考える商売になっています。

前職は国連大学におり、地球全体がどのように動いているかということが、一つの大きな私にとっての謎だったのですが、少しわかってきたような気がしています。その前は東京大学にいましたが、そのときは材料やいろいろなことをやっていて、ライフサイクルアセスメントなど、いろいろなことをやっていました。考え方をホームページに 11 年間続けて、毎週１編ずつ上げていますので、ぜひお読みいただければと思います。

【草野氏】

わかりました。では、安井さんのお名前を入れていただければ、すぐ出てくるということですね。では続きまして、桶谷さん、お願いします。

【桶谷氏】

学生の皆さん、お疲れさまでした。積水化学で実は 10 月から部署が異動しまして、環境経営グループにずっといたのですが、事業部門に移りました。まさにエコロジーとエコノミーを実現する部署で、今日の学生の皆さんの話にもありま

したが、環境の部署が一生懸命旗を振っても、事業部門がなかなか反応しないということに、私もずっと悩んできました。その反応しないほうの部署にいま移りまして、やはり行ってしまうと利益が優先なのかとか、いろいろ悩みながらいま仕事をしているところです。

私の学生時代はこういう制度があったのか、よくわかりませんが、とにかく夏休みを３週間つぶしてこういったことにチャレンジするという学生の皆さんに、まずは敬意を払いたいと思っています。

【草野氏】

まずは非常に皆さん、時間のことを考えて、端的に自己紹介をしていただいてありがとうございました。学生さんでいうと 20 歳とか 21 歳ぐらいですね。私はちょうど 20 年前ぐらいに就職活動をしたのですが、環境について意識が高い企業に行くという発想はありませんでした。つまり、そういうことが企業を選ぶときに重要なポイントになるという、これまた時代というのはずいぶん変わってきたのだな。皆さんの意識の高さに本当に驚いている一人です。

ここで桶谷さんに一言だけ伺いたいのですが、実はこのシンポジウムは今年の２月にも行っていまして、そのときと今とで決定的に違うのは、経済状況が非常に悪くなっているということです。CSR に関しては、ここ数年、本当にやっていない企業のほうが少ないぐらいです。これが一種のブームで終わるのか、果たしてちゃんと継続できるのかというところは、厳しく見ていかなければいけない分野だと思います。経済状況の変化と企業の社会的な責任、あるいは環境に対する取り組み、その辺りはどうですか。空気や、実際の取り組みの部分では。

【桶谷氏】

やはり厳しいので、優先順位として同じコストをかけるなら、同じ投資をするなら、もっと短期的にリターンが生まれるものというようになりがちではあります。ただ、私どもは製品自体、ある面、こういう環境にしても、ビジネスチャンスととらえているところもありまして、こういうご時世だからこそ環境にいい製品はより売れるのだと、やせ我慢をしながらやっているというところです。厳しいのは事実で、優先順位というのはだいぶ変わってきていると思います。

【草野氏】

末吉さんは何かご意見はありますか。

【末吉氏】

桶谷さんのところは一生懸命やっておられるから安心して見ていられるのですが、日本の CSR は、みんなが一生懸命言い始めたのはこの二、三年です。二、三年前は、セミナーがあると部屋に入りきれないのです。外に出て聞いているとか、同じ会をもう一回やりますということで

した。そんなふうに非常にブームだったのです。

しかし多くの人が、私もその一人ですが、こんなことだとバブルがはじけるように消えるのではないかと、非常に心配していました。まさに今、その状況なのです。経費カットはまず CSR。CSR ってこんなものではないのです。ですから私は日本の企業に強く言いたい。あえて言いますが、そんな短絡的なバカな考え方はやめてほしいということです。CSR は本当に時間をかけてじっくりとやるものなのです。短兵急にやるものではありません。

一つだけ、そういう企業に、あるいは皆さま、若い方に注意をしておきます。いま世界の株式がこういうことになっていますが、株価を形成しているのは何かということが、大きく変わっているのです。昔は売るもの、設備の能力とか、目に見えるもの、触るものが８割でした。80 年代は企業文化が２割なかったのです。しかし、今はまったく逆転しています。企業文化、CSR、環境、人権、そういったものを考える企業こそ株価が高くあるべきです。だからこれはもう８割以上なのです。目に触れる、これは tangible といいますが、２割ないのです。そういう時代になっているということをよく認識したほうがいいです。

【草野氏】

安井さん、その辺りいかがですか。これは期待をこめて、ぜひ継続してきちっとやってほしいという気持ちもありますが。

【安井氏】

そうですね。企業に関してはおっしゃるとおりで、私が特に追加することもありません。本当に継続してやっていただかなければ CSR はしょうがない。ただ、この大不況が環境にどうなるかという意味から考えると、これはたぶん二つの面があって、先進国はしばらくお休み。３年間ぐらいお休みして、その間にたぶんエネルギー価格は下がります。今までお金をためた途上国はここで経済発展をする。どうやってやるか、難しいのだが、要するに先進国に売り込むというメカニズムでは無理なので、自分たちでとにかく経済発展をしていくのを期待しています。

しばらく前のああいうオイルのお値段では、途上国は無理です。また下がったので、今ちょっとできるかもしれない。

【草野氏】

今日は少し乱暴かもしれませんが、事務局でもいろいろと話しまして、５年後、20 年後の未来予想図をお三方にお聞きしながら、この先、環境問題と社会のあり方はどうなっているのか。そして、そのために必要な人材、あるいは自分たちは何をすればいいのかということに絞ってお話を聞きたいと思っています。

５年後、20 年後というのは少し意味があり、５年後というのは今日、参加された学生さん、それから今日、会場にもいらっしゃると思いますが、この先、社会に出て２年、あるいは１年かもしれませんが、まさにそういう状況。それから 20 年後だとたぶん企業に入ったり、社会に

出たりしていれば、少し自分の意思決定ができる、イニシアチブを取っている課長や部長というクラスになっているだろうということを想定して、５年、20 年という未来を少し聞いていきたいと思っています。

まず末吉さん、お願いします。５年後、20 年後、環境問題と社会のありようはどのように変わっていると想像されるでしょう。

【末吉氏】

５年後というと、ちょうど京都議定書が終わり、ポスト京都が始まる頃ですね。2012 年から 2013 年ぐらいです。先々週の COP14 で残念ながら今回は進展はなかったのですが、いちおう予定としては来年 COP15 で、2013 年以降が決まる予定になっています。多少、半年かそこら遅れても、2013 年の体制は決まると思います。

つまり 2013 年は今の時点よりもはるかに大幅な削減が社会に要求されます。特に先進国です。ですから日本だと、この京都議定書のマイナス６などという、とぼけたことを言っているときではなく、これは非常に厳しい削減目標が日本にも課せられる。それを日本としてどう消化していくのか。非常に大きな議論が巻き起こっている頃だと思います。あるいはいろいろなところで新しい変化としてのビジネスも、もちろんいろいろなところが始めるでしょうし、税金だって予算の中でたくさん使われると思います。ですから、世の中が大きく転換を始めるのが、たぶん５年後ぐらいではないかと思います。これは希望的観測と同時に、そうしないと 20 年後などちょっと想像できないかもしれないです。

私が特に若い方に申し上げたいのは、社会は大人が変えてくれるのだという話ではなく、自ら変えていくのだと、そういう気持ちも強く持っていただかないと、ともかく周りの大人の背中を見て生きていたら、皆さんの将来はないのです。本当にそうだと思います。そういう覚悟をちゃんと持たないといけないということです。５年後といえば、この会場におられるあらゆる世代の方が、今日から比べてはるかに大きな変化を、少なくとも頭の中と心の中にお持ちになる。そういうときになると思います。

20 年後は 2028 年です。世の中が完全に切り替わって、21 世紀型の、いわゆる低炭素社会のとばりに入っている。あるいはもう相当実現も始まっている。そういうことになると思います。なにせヨーロッパは 2020 年には 1990 年の最低でも２割CO_2を減らすということを言っていますから、2030 年ぐらいになるとヨーロッパの多くの国、特に日本が競争する先進国、ドイツ、フランス、イギリスなどは、おそらく今に比べて 30%か 40%ぐらいCO_2を減らしている社会、つまり低炭素社会をもう実現し始めていると思います。

ですから日本はそういった競争に勝てないと、日本が明らかに GDP はもとより世界の中における位置づけがどんどん秋のつるべ落としのごとく、秋の夕日のごとく落ちていく。そういうことになると思います。ですからもう一回振り返って

５年後を考えると、５年後に我々がどういう方向かを打ち出せるかによって、20年後の日本のあり方、特に世界の中における競争力、存在感、若い人にとってみれば魅力ある国になっているのか、そうでないのかの分かれ道になるような気がします。

【草野氏】
では続いて安井さん。

【安井氏】
絵が出ますか。やはりこれが出ないと、なかなか複雑すぎて言葉では説明できなくて。今の話を少し絵にしたようなものなのですが、この間、COP では 2050 年の半減、どこから半減かよくわからないのですが、2007 年の半減だとして、13 ギガトンというターゲットになります。もし 1990 年がベンチマークイヤーだったら、10 ギガトンというターゲットになります。そこに行くのは、G8 はいちおう合意でもないのだけれど、何となく目標は定めた。

それに対してIEAという国際エネルギー機関のようなものは、世界全体でこんなふうにCO_2は増えていってしまうのではないかということを言っています。もしこれが本当であれば、ここは 60 ギガトンなのです。60 ギガトンで 10 ギガトンだと６分の１です。12 だったとして５分の１です。単純に伸ばしても、本当に 50 ギガトンぐらい行きそうだから、こんなところにどうやって行くのよというのが、ものすごく大きな問題として今あるわけです。

いま末吉さんがおっしゃっていた、先進国は非常に厳しいというのは、ここのゴールで出せるすべての 10 ギガトンないし 12 ギガトンの排出量というのは、途上国だけが 1993 年、94 年に出していた排出量なのです。中国はまだ経済発展を始めていないのに、そうなのです。それを全部の途上国で分け前をやれやというのは、まあいいところで、たぶん OECD 諸国は 2050 年、排出量ゼロと言わない限り許してもらえないなと思っているのです。

世界全体のことばかり言っていて先進国は自分のことを言わないではないですか。特に 2020 年をどうするかということを、いま言わないというのが今回の大きな争点です。ですから 2020 年の仕組みが今、末吉さんのおっしゃった話で、だいたい 2013 年からの新しい枠組みで、それが来年決まるから、本当を言うと５年先のほうが予測が難しいかもしれないです。

20 年後というと 2028 年でしょう。2028 年はこの辺ではないですか。たぶん現実的にはこのように、要するにもう先進国は削減を始めていて、このぐらいまで下がっているのではないかな。そうでないとたぶんだめで、途上国はどんどん増えていき、やっとここで世界全体でピークアウトをする。その時期が 2020 年で、この辺からものすごい勢いで下がっていこうという時期かな。

そうなると、下げるのはどうやって下げるかというと、まずは技術で下げ、その次は社会システムで下げ、最後は文明で下げるしかないと思います。そういうことがたぶん起きているのかな。ある意

味、文明のチェンジまで起きているのかもしれないなという気がします。どんな文明かというのは、先ほど裏でお話ししていたので、また後ほどお話しをさせていただきます。

【草野氏】
はい、ぜひ。非常に興味深いお話がいろいろとあります。では桶谷さん、お願いできますか。

【桶谷氏】
企業から見た場合、５年後というのはけっこうリアルで、実は今、５年先の中期ビジョンというのをまさにつくっている最中です。そういう意味で５年後というのは企業にとってはリアルです。どういう取り巻く環境になっているかということも想定して、いろいろ考えているのですが、一つはリスクとチャンスが顕在化するのではないかと思っています。特に環境面においては、例えば排出権のような新しいビジネスが生まれたり、法規制がますます強化されたり、あるいは開示要求や、いろいろな外部からのリクエストも増えてくるので、そういう意味ではリスクもあり、チャンスもその分増えるだろうと思っています。そういった意味で５年後は環境問題というのは、企業にとっては経営の柱、経営の中枢という位置づけになってくるのではないかと思っています。

2028 年、20 年後ですが、去年 2030 年環境ビジョンというのを、うちの会社で横断的にやり、そのとき安井先生にもレクチャーをいただきました。2030 年を想定してバックキャスティングといいますか、20 年後からさかのぼって、ではいま何をすべきかという考え方をしてみました。この考え方自体は、特に学生の皆さんにはいろいろな物事を考えるときに時間軸を長く置いて物事を考えられるので、いいなと思っています。

実際は何が起こるかは想定しかできないので、ではその線上でいま何をやるかということを、きっちり考えられるかということになってくると思います。そういった意味では環境問題はそういったことで、まずは５年後を考え、その先を進んでいくという形で現状、企業はやっているというところです。

【草野氏】
伺っていると、末吉さんからもあったように、2030 年は低炭素社会の真っただ中にいて、安井先生からあったように、文明のチェンジが求められるという、そういう中を私もそうですが、むしろ皆さん、若い人たちが社会のまさに中枢で、そのときはたぶん中堅なのか、中心となってやっていかなくてはいけないのでしょう。そうなると例えば今、こまめに電気を消しましょうとか、そういうちょっとした省エネ努力だけではそんなものはたぶん達成できないような気がする。つまり何か新しい発想、新しい人たちがたぶん求められてくるのではないかと思います。

さて、そこで伺っていきたいのは、そういう５年後、20 年後を見据えて、私たちはどんな準備をしておかなくてはいけないのか。そして社会として、社会を動

かしていく人間として何を考えなくてはいけないのかというのを伺いたいと思います。安井先生、いかがでしょう。

【安井氏】
今おっしゃってくださったことを、もう少し一般的にしゃべると、やはり未来がどうなるかという予測能力のようなものがたぶん求められるのかという気がします。先ほどの発表を後ろで聞かせていただいて、非常に要領よく発表もされていたのですが、たぶん何かぶち破る力のようなものがないとだめなのかというのが、正直な印象です。

というのは、今まで私もいろいろな企業の方とお付き合いしていて、この企業はなかなかやるなと思うと、どこかにやはりキーパーソンがいるような感じがあります。これから先もたぶんそうではないかという気がしていて、そのキーパーソンというのはたぶん未来予測能力を持って、かつ極めて行動力がある。あまり秀才ではなく、やんちゃで乱暴で、場合によると企業にとっては厄介者かもしれない。しかし、そういうのが必要になってきて、これをつぶさない企業は伸びるが、つぶすと終わる。こんな感じかなんて思っています。まず人としては。

【草野氏】
先ほど先生が出されたグラフで見ると、2050 年までに半減する。あんなうまく半減できるようなグラフを描くには、たぶん今のこのライフスタイルの延長線上にはあり得ないわけですね。何が変わるのですか。

【安井氏】
もちろんあり得ないのです。先ほど後ろでお話ししていたのは、いま我々がつくってきた、あるいは使ってきた文明というのは、西欧文明です。西欧文明というのは、例えばアメリカに行ってくだされば わかりますが、アメリカの国道は、誰も走っていないのに高速道路があるのです。しかし日本も似たようなことをやっていて、いま第２東名などというのをつくっているのだけれど、たぶんこれは 100 年間ぐらい使い続けて、100 年後、どんな車が走っているかわからないでつくっているのです。考えてみるととんでもない話なのです。

こういうのを私はグリッド型と称しているのですが、国土をベタ一面にグリッドでもって張り巡らせて、それでサービスをベタ一面やる。別の意味で言えば、家のセントラルヒーティング型なんだな。このタイプはもうだめなのかと思い始めていて、いま何だと言われると、新こたつ型文明と称しています。

【草野氏】
それは先生のつくった言葉ですね。

【安井氏】
そう、そう。新こたつ文明。こたつだと、先ほどの草野さんではないけれど、あれはだめでしょうとおっしゃるから、いちおう「新」を付けようかと思っています。こたつの消費エネルギーってものすごく低いですね。しかもだいたい４人ぐらい入って固まって何かやっているわけです。一人でこたつってなかなか入ら

ないんだね。これもまたいいところなのだけれど。そういう文明、どこが具体的に違うのかというと、例えば最近気に入っている商品として、パナソニックさんのビューティ・トワレというのがあります。トイレです。その便座はとにかく人が入らないと寝ているわけね。何もしていないのだけれど、人が入ると６秒間で人を検知して、６秒間で適正な温度にして、それでまたいなくなると下がってしまうのです。

本当に必要なときに必要なところだけ、必要なことだけしかサービスしない。こたつというのは、たぶんそうなのです。人間というのは足さえ温めていれば、そこそこ行ける。頭はむしろ温めないほうがいい。そんなような形にいろいろなものを考えていくことで、そういう文明はたぶん西欧の連中は発想ができないので、おそらく東洋文明なのではないかという気がします。日本文明のほうがいいかもしれないけれど、それで世界に広めることができると行けるのではないかと思っています。本当に必要なものは何かという話です。

これはたぶん末吉さんもおっしゃることは同じなのだけれど、本当に必要なことをとことん突き詰め、それだけサービスをやり、本当に必要なのですかというのをみんなに聞くのが重要かと思っています。それがこたつ文明です。

【草野氏】

末吉さん、いかがでしょう。

【末吉氏】

私は新しい物差しで自分や周り、社会を見ることがこれから必要になってくると思います。一、二、例を挙げます。エコロジカルフットプリントって聞いたことがありますか。地球の自然が人類社会に提供してくれるサービスがありますね。農水産物などがそうです。実は今年の９月 23 日でこの 2008 年、１年間分を我々は使いきったという発表がありました。これはある NGO です。12 月 31 日になるといくらかというと、140%使うそうです。私が学生時代だった 60 年代は、全体の６割しか使っていなかったのです。しかし 1986 年に１年で１年分使い切り、今は 140%。地球資源でいけば、いま人類社会は地球の 1.3 個分使っているそうです。このままいくと 2030 年に２個分使う。不可能でしょう。

あるいはフードマイレージって知っていますよね。農場から皆さんの口に運ばれるまでの距離を測ろう。これは日本で行くと、ざっと 9000 億トンキロなのです。１トンを１キロ運ぶ単位でやると、なんと 9000 億。アメリカがいくらかというと 3000 億しかないのです。人口は３分の１で３倍ですから、つまり 7 倍分近く、日本はものを遠いところから大量に運んできている。こういうことがいつまでも続けられるわけはないです。

こういうことを考えると、これは何か変えていかなければいけないです。そのことを一つ申し上げれば、もう空気はタダではなくなったということをみんなで認識しようということです。空気というのはCO_2、二酸化炭素なのです。つまり

我々はこれまで空気はタダだ、いくらでもあるのだ、無限の資源だと思ってCO_2をいくらでも出してきました。しかし、その結果が温暖化を引き起こしているのです。そしてもっともっとひどくなるのです。そのひどくなった地球環境を守るには、もうこれ以上CO_2を出さないようにしよう。それが先ほどの安井先生のお話でしょう。

これはちゃんとコスト、汚し賃を払ってもらいましょうということです。きれいにするために。ですから明らかに社会の基準が変わりました。今まではCO_2を無限でタダだと思ってきたことを、これからは有限でコストがかかるのだと、そういう切り替えです。ですからすべての選択肢にCO_2をいつまでも出し続けるのかという問いかけと、CO_2を減らすのでしょうかという問いかけを絶えずして、出し続けるのはもうやめましょうという話です。減らすことにどんどん切り替えましょうということです。そういう大きな変化が生まれます。

私の育ってきた時代と、明らかに皆さんの未来は基準が変わります。今まで右だったものが左になるのです。左にあったものが右に来ます。そういう非常に大きな変化が現れます。ですからこれから皆さんは、いま自分たちが当然だと思っている社会からのサービスを、もう一回この目で見直してほしいのです。そのサービスの裏にどういうコストが払われているのか。地球環境を汚すというコストはいかほどなのか。どれだけの石炭や石油を使っているのか。どれだけの無駄を使っているのか。無駄の裏には、それを手に入れられない人が大量にいるのです。

最後に一言。いま皆さんと同時代に、この地球で生きている 67 億人のうちの９億 8000 万人が飢餓状態です。食べられないのです。14 億人が１日 100 円玉１個で生きているのです。100 円玉１個、そこに落ちていて拾いますか。泥にまみれていたら、絶対に拾わないでしょう。しかし、その 100 円玉１個で今晩寝て、明日目を覚ましたら生きている。そういう人が 14 億人いるということです。こういったことも、ぜひ若者として考えていただきたいということです。

【草野氏】

桶谷さんにも伺いたいですが、企業人の立場から、例えば商品を受け取る側にしても、より早くとか、より付加価値があるものとか、いろいろなものを要求してきた。先ほどお二方が必要なときに必要なだけのでいいではないか。そのように変わっていくということもあるけれど、今はそうではなく、言ってみれば浪費文明の中に私たちは暮らしています。その変換を求められる中で企業としては、なかなかそこに踏み切っていく、つまり言ってみれば考え方の転換をしていくことの怖さのようなところも、同時に抱えていらっしゃると思います。

【桶谷氏】

例えば１週間で届くものが８日かかってしまうと、他社との競争に負けてしまうのではないかということで、そういう恐怖感は当然あります。もう一つ、たくさんものをつくり、たくさんものを売る

というパラダイムの中でやってきましたので、大量生産、大量消費のような話ですが、実はいまだにそこから脱却できていないのではないかと思っています。

最近 PSS（Product Service System）という言葉が言われていて、それをいろいろ勉強しているのですが、自分の会社でつくった製品を通じてサービスを提供するという考え方に徐々に変わっていくのではないか。大量生産から変わっていかなければいけないな。そういうときメーカーはどうしたらいいのだろうと、そこが悩みなのですが、メーカーとして将来どうあるべきかというところは、課題かと思っています。

もう１点、学生さんに考え方という意味で、よくビジネススクールなどで戦略的思考というとき、三つのポイントで広角的にと、長期的にと、多面的にということを考えてビジネスモデルをつくりましょうというのが、教科書によく載っています。若いうちからでも環境問題を考えるときは、まさにこの３点からいろいろ考えられるので、将来ビジネスリーダーになっていくための一つのトレーニングとして、自分たちで事業を組み立てるとか、ビジネスモデルをつくるのに環境問題は非常にいい題材にしては失礼というか、もっと大事な問題なのですが、入社してまずそれをやってみると、けっこうおもしろいかと、少し思ったので。

【草野氏】

時間もどんどん来てしまいますが、本当に社会が変わっていくのだ、しかし、誰かが変えてくれるのではなく、自分たちが変えていくのだという気概をぜひ持っていただきたいと思います。

最後に皆さんから、どんな企業人、あるいは社会人を期待するのかというお話を伺いたいと思います。では安井さん、お願いできますか。

【安井氏】

企業人というのは、やはり金をもうけないとしょうがないのです。それはそうなのだけれど、結局どういうスタンスで金をもうけるかというのは、やはり重要だな。CSR の話などはそれなのです。そのときにどういう考え方を持つかというと、今、それから少し先、それだけではなくやはり時間というのがすごく重要なのです。だから時代を見、未来を見る。

なぜかというと、近代文明というのはだいたい何をやってきたのか。端的に言うと、何だろうということを考えると、確かに快適性や利便性を追求していたのだけれど、たぶんいちばんやってきたことは、時間を買うことのような気がします。

例えば昔だったら大阪に行くのに五十三次です。それが新幹線ですぐでしょう。その間に要するに時間が買えているわけでしょう。そういう時間を買うというイメージでずっとものをやってきて、より早く、より便利に。どうもそこの時間という要素が人間とどのようにかかわってきたか、非常に大きいような気がします。その辺をしっかり考えてほしいという気がします。

時間を買ったら、普通だったら暇になるわけです。ところが現代人は忙しくな

っている。忙しくなってしまったのはなぜなのかというのがもう一つの問題で、それでどんどん時間を延ばすということをやってきて、とうとうコンビニはだいぶ前から 24 時間営業をやっています。24 時間営業を 25 時間営業に次するのかという時代に、今なっているわけです。25 時間営業にするのかな。

【草野氏】
ちょっと無理ですね。

【安井氏】
というのが、やはり今の時代、時間というものと文明との関係を端的に示しているような気がします。ちょっとつまらないことを言っているよと思うかもしれないけれど、少し文明って何だったのだろうかということを考えながら、企業が本当に追い詰めるものはいったいこの大きな人の流れ、人間の流れの中で何かというのを少し考えつつ、見つかったら突っ走るという人間になってほしいような気がします。

【草野氏】
末吉さん、いかがでしょうか。

【末吉氏】
僕はまず皆さん、仕事を一生懸命やってほしいと思います。いきなり環境や CSR をどうしたらいいのかではなく、自分の入った会社の仕事を、その中で最もプロになるということで、仕事を一生懸命やっていただく。実はそのことが先々、環境を考えるのにどうしたらいいのかということに、非常に役に立つと思います。なぜかというと、社会を変えるにはビジネスが変わらなければいけないのです。そのビジネスの仕組みを知らない人がビジネスを変えられるわけはありませんので、まずプロの仕事師になってほしい。

それから、会社は聖域ではありません。会社と社会はまったく一緒です。会社に一歩入った途端、別世界だと思うのは大間違いです。そういうことをぜひ強く持っていただきたい。それから皆様方は入社したときから、どんなに新入社員であっても自分でやっていい仕事の裁量という言葉がありますね。右から左へ、どこの範囲であればあなたの権限にお任せします。最初、新人は小さいかもしれませんが、１年、２年たつと少しずつ広がります。係長、課長、部長になると、もっと広がります。とすれば、自分の持っている権限の幅を最大限活用してほしいのです。その中で環境に、社会にいいものであれば、自分の取れる幅の最右翼を取ってほしいのです。それは皆さんができることです。別に社長が決めなくたってできることだから、そういうことをぜひやっていただきたいと思います。

最後にお願いしたいのは、二つのソーゾーリョクを養ってほしいということです。一つの想像力は、見えないものを想像する力です。イマジネーションです。つまり将来の世代がどうなるのか。自分たちの将来がどうなるのかということ。これは見えないですね。同じ時代の地球社会に生きる、他の国の人々がどうなのだろうかという想像力です。そこで得た問題意識を仕事を通じて具体的にどうや

って創造していくのか、クリエイティブな仕事をしていくのか。その二つのソーゾーリョクをぜひ身につけてください。

【草野氏】
　では桶谷さん、お願いします。

【桶谷氏】
　私の会社に参加してくれた３人が言ってくれましたが、最初、入ったらたぶん環境という部署には入らないで、他の仕事をやることになると思います。そういったところでも、やはり環境を意識してきっちりと仕事をやってもらいたいと思っています。そういうときに身近なところから何ができるかと考えていく、あるいはやっていくことになると思いますが、それと併せて先ほど少し申し上げたように、環境を考えるというのは非常にトレーニングにもなると思っているので、グローバルに、それから時間軸で考える。なかなか事業をやると目先のことにとらわれがちになってしまうので、一方でそういったことを考える題材として、環境問題も絶えず意識してもらえればいいかと思っています。

【草野氏】
　私は皆さんよりもたぶん 20 年ぐらい先輩なのですが、今のお三方のお話も聞きつつ、いつもどこかと誰かとつながっているという意識を持ち続けていただきたいと思います。過去ともそうだし、未来ともそうだし、世界中のまったく見ず知らずの人とも、まったく無関係ではないということ。だからその座標軸の中に自分がいるのだということがあるかないか。
　これから就職されて一つの企業に入ってしまうと、人間関係を含めそれを広げていくことだけに力が注がれ、ややもすると少し視点が狭くなってしまったりするのだけれど、やはりそうやって時間軸や座標軸の中にいる自分を常に意識しながら仕事をしていっていただきたいと思います。
　どうしてもこちらを向きながらしゃべってしまうのですが、今日は本当にインターンシップに精力的に参加してくださった学生さんや、興味を持って来てくださった皆さん、本当にありがとうございました。こういう不況で苦しいときこそ、下を向いていてはいけないので、これをチャンスにするか、これをどう生かすかということがむしろ問われているわけです。だからこそ変革も生まれるということもあると思うので、やりましょう。前に進みましょう。そして、もう確実に低炭素社会の中に私たちは生きていかなくてはいけないので、その中でビジネスもし、そしてお金ももうけていく。そんなことも企業に入ったら求められるし、どう自分が生きていくかということが問われているということでもあると思います。
　少し時間が押しましたが、皆さん、ご清聴どうもありがとうございました。これでパネルディスカッション終了とさせていただきます。どうもありがとうございました。